

DT 藝文

7885

8

精環新報

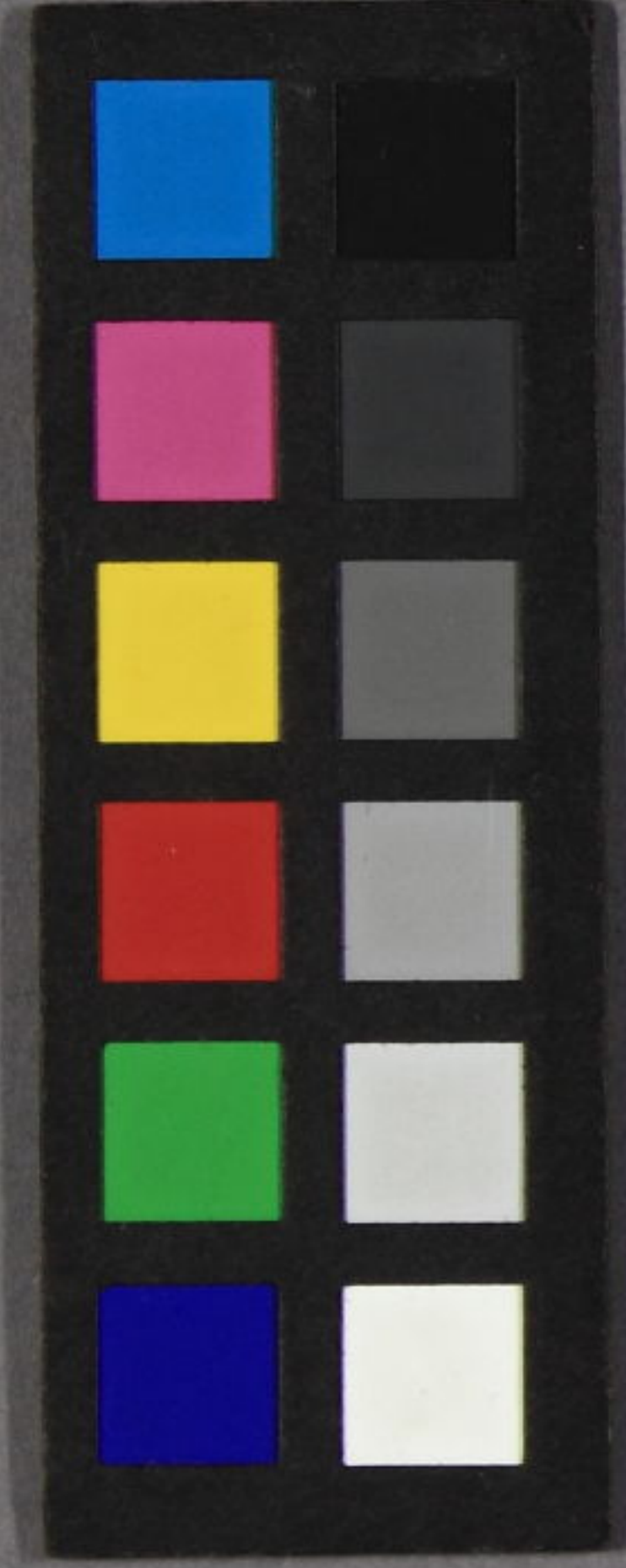


第八篇

定價一先

九十三番ヴエリード著

K.S.ASOM,



特 文庫10
7B87
8

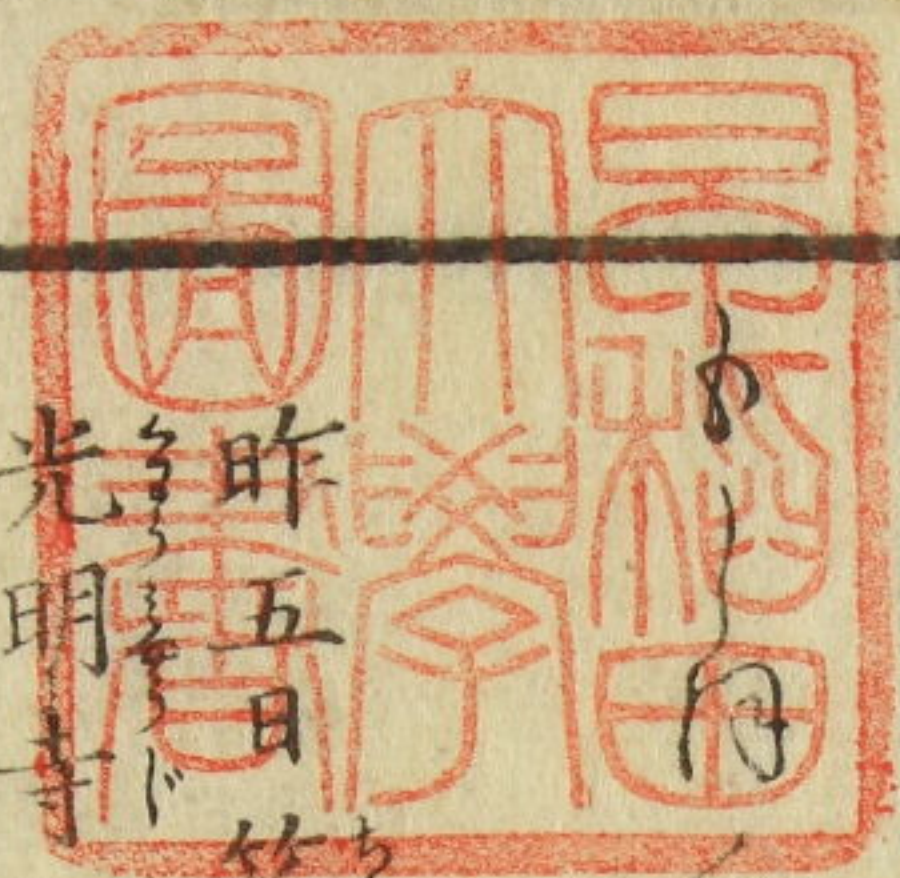
鏡燭影

第八篇 文獻一巻

六十三番ズエリ一ノ一巻



K.2.A.20M



第八篇

慶應四年戊辰五月二日



○出羽山形より來信の寫

昨日筑州の兵士九十六人岩根と中處より入込當國
光明寺へ半宿のついで翌六日又五十人をり到着致且又
當地市中嚴重に御警衛の相成中ゆ付庄内勢をむ
ことと不得西在へ引退中ゆ七日早朝筑州并山形の軍
勢五百五六十人をも寒川江と中處へ操出の相成中の當地
の陝客山形金兵衛なごびお留吉兩人子分七十人餘引卒
仕加勢のついで由何も鎗を引提雄の敷出立ぬらの事に
御望の右に付今も放火に可相成と市中一同驚動仕家

財等持運さいとうもちうんび中ちゆう只今此状相認居あきらめたり北の方きたのほう火の手
相見あひま中ちゆう由長崎驛邊ながさきえきへ趣人おもむき中居ちゆうに矢目村やめむらと中
所ところも木半焼失きはんしょうしつ相成あひな由美よみ先まへへ取急とくきゅう右木變之次第
中上ちゆうじやう以上

国四月八日四半時

山形本店より

○横濱近事

この月九日ふきさうじやうにたつひに官軍の兵士
よほどあつぎをおひさるものも有りしがよとままこり
さうじやうの醫士いしウイルリスの療治りょうぢをやむるや

○次第しだいに全快ぜんがいぬおのむり

○よとままぬのねりぢやうたるきるといひさうど貳十軒
はうり戸かどを止めて家業けいごふを空くわめり集會所あひまひのりは三人
わらぬとまきたるゆゑ外がい國人の手てをかりて裁判
所ところへ訴うたぐこの法はう三人のこゝろをまぬくのぢやうせんゆゑ
はうりぢやうなるべし

○この月をいふに乃らるるものせんえんごり
 志んはわりのふはつをさうよりむねとりのりーことに
 法然とそめおーらぶんのまゆの中はけのたぬこと
 あるとめやちをききとつりそはひとのまは
 らほこといふ

○十一二日のころ江戸の山主ふりりぬる脱走人の
 わらまきやといふ人八千子にゆき千人同心ふこのあ
 りひおれびーくば千人の内より百人の精兵
 えんごつてさうあげ中べー何時にてもおん

みこの中べきありとつりーる官軍にまごひー
 法をゆるしてありーとぞ十五六日のころのこと
 ありー

○二十三日あらんすの博覽會よりあつりきたりー
 吉由といふ人のほろーに天竺のせのろんをこほりし
 時あつ佛誕の地ちたればとて案内者をたのこ
 その寺にいつりて釋迦の像をんむといふまたすふ
 ゆるさば日本人の佛を信するよりをひくつろくよ
 すのりーあればやうく僧ごもかぎをりちのこる扉
 つけくをせたり像のおほきさの壹丈三四尺をり

はく蓮華れんげの上に結跏くつがして手をひぎにのせしむる
さる日本ふたる地藏のかしらに似たり頭も螺髪らうはつの
つらげ顔にも手足にも箔はくを押したるさまは
まふなるびとたる木像もくざうに現在げんざい日本の禪僧ぜんそうの形に
よく似たりたゞあつたひさしくなりそとよりくる
みちみく船人のうたふ歌のあしをきけば日本の
禪宗ぜんしゆうのむらぎのこたつるまむむのうたんのうに
よく似たりとものたつりしとて

○支那しなより博覽會はくらんかいにゆきし者あり又あらんす
人にも支那の貨物しなぶつをこのひあつめて博覽會はくらんかいに

出でしたるも何ぞしつぎまもなるふたることの
なり漆器しやくき磁器じきを押しにりちゆきしそのうち三四分
は日本の物とすまづて出せりとぞ

○あらんす博覽會はくらんかいに萬國ばんこくより押しし、
その國々の貨物しやぶつを持出もちだせし中にいりやハ玉石ぎよくの類
はあつたおほくしつぎその色のさぬぐありてうつく
しきこと細工さいくのよれたるハ實じつに目めをおど後ごのせり
鐘錶しゆひんハすあつるに押し物ものをさされどようげ乃
機械きかいハいぎりすをめぐり世界第一とすべしさて日本
ゆりの博覽會はくらんかいに七本國しちほんこくのうち法教ほふくのい

たりそれの國より鑑定家を出せるがその評お
もをくわくは定りたるこれにりて法國王よる
がランフリーとのふとのをたよりといへりガラン
ハ大フリーハ價とのふ心あり厚賞すこの大褒美
たのどのか意味あるべしその形はまるく洋銀の少
大なるほどあり何つこい十分あり金むくうを押し
にそのまの法國王の像を鑄付たり三代目たをれ
物なり裏日本全國と云文ありおほくの國より
何つまりたるたのめに七國へこれをたまひしはそ
うむにりりころそ日本の面目なりと見え

○四月八日の夜はとてに火災あり外國人の家も
おほく焼亡せりとぞこれの越後の新潟の人のりの
がうりたり

○桑名侯ありびにその家臣九十五人と會津藩
家老と平士二十五人あつたをるの家老そのほの女中
まゝにびる百人餘やうひのたをるひあひにあり
てよとをぬよりこぎいゑをるのあゆにをこごに
はれ二十三日のたをがれはりに新潟の着岸せ
こぞ

○四月のはじめより新潟はあめをこさるるごとく

ちりて會津その外諸藩の兵士にまゝをこすつてに
たむろしゝあるよし、まゝ脱走の歩兵千二百人をむり
水原よりみづさへりてとひり

○水戸の家臣市川三左衛門、佐藤圖書、木本森典、膳
朝比奈孫三郎等、手勢六百餘をひたり、是四月二十日
に新瀉ふりきりて寺に止宿せり

○水戸會津その外諸藩の兵をむらび脱走歩
兵等おひく、信州へ人数くらゐるべきの風説あり
ちりたり

○甲府の城の水野氏二百人、はりのめ兵はくけい

衛せり掛川よりも百五十人、はりの奥平氏も百五十人
むのりの人数をゆいて水野氏をたすけてとも
に甲府城をまのり、いと信州の真田氏も、は
城をまのり、が北部の兵あつたに、信州の襲
入の報をきいておどろけり、ちりたりとぞ

○

らんのみをよみて人よはるや
つぐとひをしのぶをさほらむに
さうらう

そのつとむくちりてあはれむ

○新聞紙の作りたるは實説まことをのめりて出版すべきものなり
されども遠境とんきやうの事たるは一々その確否たしかをたゞと
するうちに月日も経るべきや世間の人もとてなかり
たらんぬ陳腐ちんぷのむのりかるとなりてつまらざる事
ばこそ少々の實事まことに多量たうりやうたりともつづくをせうする
ゆゑはむづかしいと云ふ事があるが何と云ふとゆゑか
ゆゑはむづかしいと云ふ事があるが何と云ふとゆゑか
耳にのりやむづかしいが新聞のぞりたるものにて
なれば則ちそのむづかしいは通じたり

西垣文庫 特
文庫 10
7387
8